

0 歳児

月齢6か月 「おもちゃが取れた！」

これまでの子どもの姿（経験してきたことや育ち）

- 近くにある物を見ているだけで、手に取れないと、すぐに別の物に目を向けていた。
- 保育者が手に持たせてあげると、握ったり振ったりして遊んでいた。
- 体を動かそうと、腹部を支えにして両手両足を浮かせる体勢（飛行機のポーズ）では、体をよじってはみるが、目的の物を取ることはできなかった。

ねらい ● 伸び伸びと体を動かし、はう、歩く等の運動をしようとする。

エピソード

- 近くにある玩具を取ろうと、両足と左手を床に付き、体を支えて、玩具に向かい右腕を伸ばしている。



おもちゃ発見！
欲しいな～。
取れるかな～？

- 手のひらと指を使い玩具を取ろうとしたが、うまくつかめず、腕を振ると、玩具が体の横にそれてしまった。
- 横にある玩具を取るため、右胸周辺を体の軸にして、全身でバランスを取ろうと、両足を浮かせている。



あれっ？
こっちに行っちゃった！
取れないよ～。

- 玩具をつかみ、自分の体のそばへ寄せることができた。



やった！
取れた！



疲れた～。

保育者の援助

- 一対一の関わりの中で、「すごいね」等、子どもを励ましたり、最後に玩具を手にしたときには、「持てたね」「うれしいね」等、子どもの気持ちに共感するような言葉をかける。
- 体の反動により、顔や頭を床に打つ等の危険がないよう、見守り、安全を確保する。

環境の構成

- 玩具は、子どもの視界に入り、かつ少し体を動かせば自分で取れる位置に置く。
- 子どもが安全に伸び伸びと動けるように、発達段階が異なる子ども（はう、歩く等）と部屋を分ける。
- 玩具は安全で衛生的な布製の柔らかい物にする。
- 顔や頭を打ったときの衝撃緩和や手足の滑り止めのために、ジョイントマット等を敷く。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点から、大切にしたいポイント

- ★ 伸び伸びと体を動かし、腹ばいや寝返り等、全身を動かして遊ぶことを楽しむ。
- ★ 玩具を通して、身の回りの物に親しみ、興味・関心をもつ。
- ★ 欲しい物を獲得できた満足感、達成感が自信となり、再び挑戦してみようとする。

これまでの子どもの姿（経験してきたことや育ち）

- 4月の入園当初から、保育者の言葉かけや歌に対して、笑ったり、「あー」「うー」と喃語を話したりしていた。
- トンネルくぐりや斜面登り等、初めて経験することには戸惑いがあったが、保育者と一緒に遊ぶ中で安心して自分から遊ぶようになった。

ねらい

- 特定の保育者に要求を受け止めてもらい、親しみをもち安心して過ごす。

エピソード

- 最初はボールプールの中に入ることに戸惑いがあり、入ることを嫌がっていた。
- 保育者と一緒にボールプールに入ると、泣かずにボールを触り始めた。



- 慣れると、ボールを持ったりなめたりして、ボールプールに入ろうとするようになった。
- 保育者がそばにいと自分から入ってボールを持ち、喃語を話したり、声を出したりする。



- ボールプールの中でボールを持ったり、なめたりして遊ぶ。
- 機嫌がいいと喃語を話したり、声を出して笑ったりする。



なめてみようかな。

保育者の援助

- ボールプールを怖がらないように、保育者がボールを触って見せ、安心できるようにする。
- 子どもが自らボールを触ったり、なめたりして遊び始めたら、一緒に入り、遊ぶ楽しさに共感する。
- 声を出して楽しんでいる様子を受け止め、やり取りの心地よさを感じられるようにしていく。
- 安心感や信頼感が芽生えるように、できるだけ特定の保育者が愛情豊かに関わる。

環境の構成

- 保育室の中央に設定し、周りには何も置かず、けがをしないようにする。
- ボールやビニールプールはなめても大丈夫な素材を選び、清潔に保つ。
- 落ち着いて遊ぶために、子どもの人数に合わせた広さを確保する。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点から、大切にしたいポイント

- ★ 表情や声、喃語等で保育者とのやり取りを楽しむ。
- ★ 保育者との応答的な関わりにより、心地よいときは笑ったり、不快なときは泣いたりして要求を表す。

0歳児

月齢10か月 「あれ、何かな？ 触ってみよう！」

これまでの子どもの姿（経験してきたことや育ち）

- 「保育者は安心できる人」ということが感じられるようになり、その愛着関係の中で、周辺にある物へ目が向くようになってきた。
- 「これは何かな？」と感じた物の方へはって行き、触れてみたいという探索意欲が芽生えてきた。
- 物への関わり方も、握る、つまむ、一本指で触る、持ち上げる等、いろいろな触り方で確かめる姿が見られるようになった。

ねらい

- 身近な物に対して興味や関心をもち、様々な素材に触れて遊ぶ。

エピソード

- これまでの経験から、たらいの中に楽しい物があると分かり、保育者がたらいを用意すると笑顔で近寄ってきた。
- たらいの中にある袋に何か入っていることに気付き、つんと指先で触り始めた。



何だろう、触ってみようかな。



あっ！ぶにぶにする！おもしろいな。もっと触ってみよう。

- 偶然につかむことができると、保育者を一瞬見た後、つかんで落とす遊び（重さを感じている様子）を繰り返しながら楽しんでた。
- 「ぶにぶにして気持ちいいね」と伝え、保育者を見て、再度感触を確かめながら遊んでいた。



再度感触を確かめながら遊んでいた。

あれ？ 持てた！もう1回やってみよう！

保育者の援助

- 子どもが確かめている様子をそばで見守る。また、繰り返して遊んでいる様子を見て「冷たいね」「ぶにぶにしているね」等と子どもが感じている感覚を言葉にして伝える。
- 「やってみよう」という思いを、しぐさや表情からくみ取り、受け止めることで、探索意欲が高まるようにしていく。

環境の構成

- 子どもが興味・関心をもてるように密閉式の袋に水と1cm角に切ったきらきらテープ、金魚の玩具等を入れた物を用意する。
- 子どもが自分から触ってみたいという気持ちになるように、教材は普段から遊び慣れているたらいに入れて用意する。（日々の保育の中でボールを入れて遊んでいた）

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点から、大切にしたいポイント

- ★ 触る、なめる、見る等、いろいろな感覚を味わい、身近な物への興味・関心が高まることで、自分から手を伸ばして触り、確かめて楽しむ。
- ★ 保育者と十分に関わって、親しみをもちながら安心して過ごす。

事例から読み取る **0歳児** の特徴

- 身体感覚が育ち、伸び伸びと体を動かし、寝返り、ずりばい、四つんばい、座る、つかまり立ち、歩く等の運動をしようとする。
- 見る、触れる、探索する等、身近な環境に興味や関心をもち、自分から関わろうとする。
- 保育者の受容的・応答的な関わりにより、体の動きや表情、発声等で、保育者と気持ちを通わせようとし、身近な人と一緒に過ごす喜びを感じる。



この時期に

大切にしたい保育者の **援助**

一人一人の発達に合った動きを十分に経験し、自ら体を動かそうとする意欲を育む

- 自ら関わろうという意欲を引き出すために、表情、発声、体の動き等の感情の表現をしっかり受け止め、様々な活動を楽しむことを通して表現が豊かになるようにする。
- 保育者が何かをさせたり、過剰な言葉がけをしたりせず、子どもの思いをくみ取り、援助をしたり環境を整えたりする。

身近な人への親しみが感じられるように、子どもの欲求に適切に応え、愛着関係の基礎を育む

- できるだけ同じ保育者が子どもの多様な感情を受け止め、愛情豊かに一人一人に応じた適切な援助を行う。
- 子どもが発見したことに対して言葉にしたり、できた喜びを共有したりしていく。
- 自分の感情等を表し、それに相手が返す言葉を聞くことを通して、言葉が獲得されていくため、保育者は、子どもの目を見てゆっくりと優しく話しかけ、言葉のやり取りを楽しむことができるようにする。

この時期の

環境構成の **工夫**

周囲の人や物に興味を示し、いろいろな物に手を伸ばそうとする意欲を育む

- 遊びを通して感覚の発達を促すために、玩具の音質、形、色、大きさ等、子どもの発達状態に適した物を選ぶようにする。
- 子どもが体を動かしたくなるように、一人一人の発達に合わせた玩具や遊具を、少し手を伸ばせば届くところに用意する。
- 安全で衛生的な環境の下で、自由に探索意欲を満たして遊べるように、身の回りの物は、常に十分な点検を行うようにする。



6月「これは何だろう？ 触ってみよう！」

これまでの子どもの姿（経験してきたことや育ち）

- 指先や手のひら全体で絵の具を触り、感触を楽しみながら、画用紙に点々や線、手形を付けて遊んだ。
- 戸外では砂に触れて遊び、手のひらで砂をぎゅっと握ったりつかんだりして感触を楽しんでいる。また、保育者が型抜きで抜いた砂を「もう1回！」と手でつぶして壊すことを繰り返し楽しんでいる姿が見られた。

ねらい

- 保育者との安定した関係の中で、いろいろな素材に興味や関心をもつ。
- 保育者と一緒に様々な感触を楽しむ。

エピソード

初めて見る小麦粉を不思議そうな目で見るA児。保育者が触る姿を、前のめりになって興味をもって見ている。その後、A児も指先で触って「さらさら」と感触を味わっていた。「本当だね。さらさらだね」と保育者が声をかけて、水を加えて小麦粉粘土をつくり始めた。じっくりと見ているA児。保育者がA児の前に置くと、そうと指先でつつんしていた。保育者が粘土を触るとA児もぺたぺたと触ったり、ぐにゃぐにゃと両手で握ったり、指先でつまんでちぎったりしていた。B児は手に付く粘土が気になる様子。「ぺたぺたするね」と声をかけるとうなずき、粉を増やすとまた手で触り、感触を確かめていた。C児が手のひらで転がし、粘土を細長くしている。「長くなってきたね。何ができたのかな」と話すと、「ヘビだよ」と話した。D児もまねをして粘土を細長くし始め、「ヘビだよ」とうれしそうに見せていた。



保育者の援助

子どもの気持ちに共感する

- 好奇心や探求心が拡大していく時期なので、子どもが五感を使った遊びの中で感じたことを丁寧に受け止め、言葉にしていこう。
- 「さらさらだね」等と感覚とイメージを結び言葉をかけ、気づきを促す。
- 子どもの発見や驚きに共感し、言葉や表情で応えていく。

環境の構成

興味をもてるように

- 様々な感触を楽しめるように、水の量の異なる小麦粉粘土を用意する。
- 様々な気づきや発見の喜びを経験できるように、視覚的にも興味・関心を引く食紅等を用意する。
- 近くで遊ぶ友達や保育者の姿から、自分なりの楽しさが見つけられるように、机の配置や座る位置を考え、場を構成する。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点から、大切にしたいポイント

- ★ 自分で何かをしようとする気持ちが高まり、自分でできる部分は自分でしようとしながら、その楽しさや喜びを感じる。
- ★ 自己主張を繰り返しながら、自分でしようという気持ちが芽生える。
- ★ 好奇心や探究心が拡大し、見たり、聞いたり、触ったりしながら、興味をもった物にじっくりと関わる。
- ★ 小麦粉粘土や砂、水等のいろいろな素材に親しみ、楽しむ。

これまでの子どもの姿（経験してきたことや育ち）

- 4月の入園当初は一日中泣いて、保育者に抱かれて過ごしていたが、少しずつ自分から保育者の元を離れ、玩具を触ろうとする姿が見られるようになってきた。特定の保育者が近くにいることで、気に入った絵本を保育者のところへ持って行き、読んでもらうことを喜んでいた。
- 担任以外の保育者や子どもにとって初めてのことにに対しては、慎重な姿を見せ、遠くから見たり、首を振って嫌がったりしていた。保育者は無理に誘わず、子どもの姿を受け止めるとともに、自分から手を伸ばそうとする姿を待った。それを繰り返していく中で、子どもが「この人なら大丈夫」と思える保育者と一緒ならば、新しいことに對しても挑戦しようとする姿が見られるようになってきている。

ねらい

- 保育者に見守られながら、一人遊びを十分に楽しむ。
- 保育者に気持ちを受け止めてもらい、安心感をもって遊ぶ。

エピソード

K児は慎重に周りの様子をよく見ている。この日はいつもと違う場所にブロックを設定した。他児がブロックで遊んでいる姿をじっと見て、興味をもち近づくが、手に持つことはなく、また部屋の隅に行き、周りの様子を見ていた。ブロックで遊んでいる他児が少なくなってきた頃、保育者はK児の遊びたい気持ちをくみ、空いたスペースに新たにブロックを追加すると、K児は少しずつブロックに近づき、触ったり、眺めたりしていた。保育者のまねをしてブロックを並べたり、積んだりを繰り返していた。保育者は「大きいね」「これ何だろうね」等と言葉を添えたり、K児の気持ちに寄り添いほほ笑んだりすると、K児も一緒に笑い、再びブロックを積んで遊んだ。ブロックで何かをつくるたびに、重ねたブロックを手に持ち、横にいる保育者に見せた。保育者がK児の姿を受け止め、拍手をすると、笑って喜び、何度も繰り返していた。



保育者の援助

やってみようかな

- 初めてのことに慎重な姿を見せるときは、無理に誘わず、気持ちが向くのを待つ。
- 子どもの“やりたい”気持ちの芽生えを見すごさず、保育者も一緒に遊んで楽しんでみせる。

保育者と一緒に

- 保育者との信頼関係を基盤に、子どものそばに寄り添い、安心感をもってやりたいことに取り組めるようにする。

環境の構成

落ち着いた環境で

- 自分なりに遊びを楽しむことができるように、一人用の間仕切り等を用意して、一人一人の空間を確保する。
- 一人一人が好きな遊びを見つけて楽しめるように、遊びの場をいくつかに分けて設定する。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点から、大切にしたいポイント

- ★ 身近なことに興味をもち、自分から“やりたい”“触ってみたい”と思い、一人でじっくり遊びを楽しむ。
- ★ 自分の要求を受け入れてくれる大人の存在をよりどころとして（または身近な大人との信頼関係を深め）、自我を発揮し外界への好奇心や関心が旺盛になる。
- ★ しぐさや表情、言葉等で自分の思いを表現する。

これまでの子どもの姿（経験してきたことや育ち）

- 11月頃から自分のマークや持ち物が分かるようになり、簡単な身の回りのことも自分でやってみようとする姿が見られるようになってきた。園庭に行くことを伝えると、自分で上着や帽子、靴を出し、身支度を始めようとしている。初めは「やって」と保育者に援助を求めることが多かったが、日々の生活の中で繰り返し行うことで、少しずつ自分でやってみようとする気持ちが芽生えている。

ねらい ● 保育者の手助けを受けながら、簡単な身の回りのことをしようとする。

エピソード 「今日も砂場で大きいお山、つくろうか！」とY児に話すとうれしそうに笑い「うん！」とうなづく。昨日の体験が思い出されたのか、山づくりに期待をもち、早く園庭に行きたい気持ちになっている。「じゃあ、お庭に行こう」と声をかけると自分で靴を持ってきた。

少しずつ自分で靴を履けるようになってきていることがうれしく感じられるようになってきているY児。面ファスナーをはがし、靴に足を入れようとする。つま先は自分で入れることができたが、かかとを入れるのが難しい様子のため、保育者が手を添えると「Yちゃんが！（やるの）」と自分でやりたい思いを訴えてきた。「自分でできるんだよね」と気持ちを受け止めると「うん！」と意欲的にやろうとする。その姿を見守りながら、保育者はさりげなく援助し、Y児は靴を履くことができた。「履けたね」と声をかけるとにっこりと笑って園庭に行った。



保育者の援助

一緒にやってみよう

- 自分で行おうとする気持ちを受け止め、様子を見守ったり、できないところはさりげなく援助したりしていく。
- 少しでも子どもが自分でできたときは、できたことを一緒に喜び、認める言葉がけをしながら、「次も自分でやってみよう」とする気持ちにつなげていく。

環境の構成

自分のやりたい気持ちの実現できるように

- 興味をもった子どもが、じっくりと行えるように、一人一人が落ち着ける場所を用意する。
- 履きやすいように靴を履く台を用意する。

自分の持ち物や場所が分かるように

- 子どもが自分で自分の持ち物を見付けられるように、収納する場所に一人一人のマークを付ける。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点から、大切にしたいポイント

- ★ 園庭に行くための手順が分かり、自分から身支度をしようとする。
- ★ 毎日繰り返される靴を履く等の行為を、生活の様々な場面で自分なりに試してみようとする気持ちが育つ。
- ★ 安心できる保育者を拠点にして、気持ちのままに主張し、要求が通らないときにはぐずって自分の気持ちを通そうとする。

事例から読み取る **1歳児** の特徴

- 足の運びがしっかりしてきて、全身のバランス機能が発達する。自由に歩くことを喜び、活動範囲が広がる。つまむ・めくる・ひねる等、手先を操作する機能も発達する。
- 甘えることや安心できることが基礎となり、自我が芽生え、外界への好奇心や関心が旺盛になるとともに、身の回りのことを、何でも自分でしたいという気持ちが表れる。
- 身近な大人や子どもに関心をもって関わるようになり、保育者や友達のしていることをまねして遊ぶようになる。
- 片言や二語文を話すようになり、自分の思いを言葉で表現できるようになる。



この時期に

大切にしたい保育者の **援助**

保育者にやってもらうことを求める姿から、次の行動を楽しみにし、自分からもやってみようとする姿への変化

- 安心できる保育者との関係の中で、食事、排泄、衣類の着脱等、身の回りのことを自分でしようとする気持ちの芽生えを保育者が認め、受け止めていく。
- 自分でやろうとしているときは、子どもの気持ちに寄り添い見守っていることを伝え、安心感を与える。
- 時間がかかってしまうこともあるが、一人一人のペースに合わせ、ゆっくりと子どもの気持ちや行動を認めていく。
- 「自分で」という思いはあっても、大人の援助が必要なことが多く、言葉でうまく伝えることができない。保育者は子どもを注意深く見て、その思いをくみ取り、子どもの主体性や自主性を尊重しながら援助したり、温かく見守ったりする。

保育者との信頼感を基に、自我が芽生え、外界への好奇心や関心が旺盛に

- 子どもの思いや要求を受け止めながら、しっかりとした愛着関係をつくることを大切にする。
- 保育者との一対一の応答的な関わり（遊びや生活）の中で築かれた愛着関係を基に、安心して園生活を送りながら、活動を広げていけるようにする。

この時期の

環境構成の **工夫**

物を使ったり見立てたりして遊ぶための土台づくり

- 触ってみたい、動かしてみたいという気持ちになるような素材や玩具を、手に取れるところに設定する。
- 自分でやりたいことが、実現できるようなスペースを確保する。
- 物と関わりながら、押す・引っ張る・出し入れする・積み上げる・回す等、手先の発達が著しい時期なので、子どもの関心が高い物を用意し、自由に関われるようにする。
- 自分でしようとする気持ちを受け止め、マークや簡単な表示等を付けたり、子どもが分かりやすい場や物を用意したりする。

